

永遠のためいき



永遠のためいき



昭和三十五年十二月十六日 印刷
昭和三十五年十二月二十日 発行

定価 二四〇円

著 者 新 田 次 郎

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式会社 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一
電話東京〇四代表(六二一)一五九
東京八〇八番

落丁本はお取替えいたします。

印刷・塚田印刷株式会社

© J. Nitta

製本・神田加藤製本所

Printed in Japan



永遠のためいき

瓦

新田次郎

新潮社版

装
幀

三
芳

悌
吉

抱	凍	告	眼	盗	お
	っ		に	ま	と
	た		し	れ	し
擁	霧	白	る	た	穴
			煙	唇	

三二

一四

一六

一五

一四

三四

永遠のためいき

二組のパーティー

八ヶ岳山麓を足の速い霧が動いていた。山の表面をこすって通るような背の低い断片的な霧だった。霧の間隙から晩秋の樹林が覗いていた。

霧の前線の端が頭上を通過すると、視界は閉ざされ、にわか雨が降った。

「大丈夫かしら、わたし不安だわ」

早瀬裕子が言った。不安だわという顔が笑っていた。本当に不安なのか、不安という思いっきの言葉に共調を求めるための笑いなのか、兎に角彼女が天候について、そうおそれていないことだけは確かだった。

「天気予報では、明日は晴れるということになっているわ、……でもここは山だから心配よ」
加島絢子は山だからと特に力をこめて言った。

「おいしいな、ここまで来て大変残念だわ、しかし、わたしは帰る……、三人ともこの山は初めてだし、天気予報なんか当てにはならない」

丸屋美佐は三人の登山行に結論でもつけるような言い方をした。

三人は並んだまま山を見上げた。八ヶ岳のいただけは見えない。霧の去来は、一定の法則におさめられたように続いていた。

「次のバスの時間まで二時間あるのよ、その間、この冷たい霧に濡れているの……やりきれない
気持——」

絢子はあきらめ切れない眼を足元から山へ続く黒い道に投げながら、

「でもそれよりしようがないわね」

彼女はススキの頭を千切り取って、その茎を噛んだ。

自動車のエンジンの音が聞こえた。チェーンをタイヤに巻いた自動車が彼女等とそう離れていないところで止まった。三人の男が車からおりた。

「この空模様だと相当降られますね」

長身の男が山をぐるっと見廻して他の二人に言った。三人は雨具の用意をしたり、荷物を整理した。長身の男が、三人のリーダーのようだったが、所謂山男いわゆるのグループとはどこか違っていた。

「先生、そのリックを持ちましょう」

長身の男が言った。先生と言われる男は三人の中では年長者らしくかまえて、答えるかわりに首を横に振って、山を見詰めていた。派手な格子縞のチョッキを着た男が、その先生をカメラにおさめていた。

「先生荷物を持ちましょう」

長身の男がもう一度言った。先生は答えない。霧にかくれて見えない山肌を飽くまでも見ようとでもするように、ふり仰いだ姿勢だった。視線が下に落ちた。そこに三人の女達がかたまっていた。

「先生って呼んでるわね」

早瀬裕子が小さい声で

「きつとあのひと医者さんよ」

裕子はその着想がおかしくてたまらないようにくすつと笑った。先生と呼ばれる男の風貌が、彼女の従兄の医師とどこか似ていた。若しも、その男がかぶっているハンチングを取って、頭が禿げていたとしたら、従兄とそっくりだと思った。

「先生と名がつくからには、いくらかたよりになるかな」

丸屋美佐が男のようなことばを使った。

「たよりになるって？ あの一とたちと同行するつもりなの、へんじゃあないこと、全然知らない人」と

加島絢子はとがめるように美佐の顔を見た。

「行者小屋まで、ここから四時間はかかる。そこまでの用心棒よ」

帰ると言っていた美佐は急に廻れ右をしたような言い方をすると、そうすることが、この三人の女性パーティーの総合意見でもあるかのように、リックを担ぎ直して、男たちの方へ歩いていった。

「どちらまでお出でになるのですか」

美佐は赤い縞のチョッキの男に聞いた。

「どちらって、道は一本道、行者小屋を経て八ヶ岳へ行くにきまつてゐるじゃありませんか」
縞のチョッキは捨てるようないい方をした。

「今夜は行者小屋にお泊まりですか」

美佐は長身の男に聞いた。

「そうですよ」

ノッポの男は突放すように言った。まるで女たちを眼中に入れてない態度だった。女の方からここまで言ったら当然同行しようとお世辞にも言うのが、山男のエチケットだと思つていた美佐には、この男達がひどく不親切なパーティーに見えた。彼女はいくらか腹を立てた。御一緒に願いたいとは言いたくなかったが、あきらめてはいなかった。彼女は、腕を組んだままの姿勢で山を眺めている先生に向かつて、

「天気はどうでしょうか」

と聞いた。すると先生は、吾にかえつたような顔で、

「けつしてよくはありません、だが、行者小屋までは行けるでしょう、明日の行程は今夜の天気予報を聞いて決めるよりしようがありませんね」

美佐の顔も見ず、ひとりごつのような答え方だったが、縞のチョッキとノッポに比較してやや思いやりのあることばだった。結局三人の男は女を誘わなかった。

だがノッポが先頭、二番が縞のチョッキ、三番が先生という順序で男達が歩き出すと、いくら遅れてその後を三人の女達が追尾した。自然の成行きだった。女達はこの男たちなら従いていても大丈夫という共通したものを美佐と男たちの会話の中で読み取っていた。

「賭けてもいいことよ」

裕子が歩きながら絢子と美佐に言った。

「あの先生の頭は禿げている。美濃戸小屋に着いて、あの先生が帽子を取って汗を拭くときによく見るのよ。きつと禿げてゐるわ」

「そんな年齢かしら。まだ四十にはなっていないわあのひと」

絢子が否定した。

「若禿げよ、禿げていなくなつて毛は薄い」

裕子は先生と従兄の相似をもつと現実的のものにしたかった。そんな意味のない遊びが裕子をもた笑わせた。

「賭けよう、裕子さん、先生の頭は禿げていない。私が負けたらあなたのお好きなものをなんでもおごる」

美佐が言った。

二組のパーティーは明らかに別々のパーティーだったけれども、第三者が見れば一つのパーティーだった。二つのパーティーは二十メートルほどの間隔を置いて行動していた。男たちが呼吸を入れると女達も休んだ。男たちは休むたびに煙草を吸ったが、女達はなにかを口に入れて食べ

ながらしゃべっていた。

女たちのパーティーが遅れると男たちは歩速を落として、従行者を彼等の見える範囲に置いた。一時間も歩くうちに、二組のパーティーは間隔を置いて結ばれていた。

「先生って呼んでいたわね、いったいあのひとなんの先生かしら」

台風の前で橋を流された柳川の河原で小休止している男たちに眼を投げながら絢子が言った。

「医者よ、きつとそうよ」

裕子は最初に受けた感じをそのまま固執していた。

「先生って名がつく人は幼稚園の先生から大学の教授、弁護士、代議士だって先生と呼ばれているでしょう。いずれそのうちのなにかね」

絢子は、河原に立ったまま、懐中ノートになにか記入している先生の方を見て言った。

「ちがうな、あの人は芸術家よ、画家、作家、そんな種類の人よ」

美佐は芸術家といった手前、なにか、そういう証拠でも先生の姿の中から見出さなければならぬように、

「ね、書いているでしょう。休んでいる間、あのひとはきつとなにかをノートに書きつけている」

先生がこつちを向くと彼女等は先生の噂など、露ほどもしたことはないような顔をして、澄ましていた。集中豪雨によって押し出されて来た倒木や石が川の形を変えていた。彼女等は、柳川を見たのが初めてだったが、山から押し出されて来たものと思われる巨岩や、けずり取られた川

岸の荒れ方で、ほぼ、この溪流が如何なる災難に会ったのか想像できた。

「大丈夫かしら……」

柳川の荒れ方から行く先を心配しての裕子の言葉におっかぶせるように美佐が

「大丈夫さ、先生がついている」

それを聞いて、裕子が突然笑い出した。とめどもなく笑った。笑いが伝染して三人が笑いこけた。河原で地図を開いて見ていたノッポと縞のチョッキが、笑い声に振り向いて妙な顔をした。笑い声が出発の合図のように男達は歩き出した。裕子はリックザックに肩をおすと、空を仰いだ。頭上の霧のひとかたまりが通過しようとしていた。顔を雨粒が打った。あの、先生と呼ばれる人物はなにものであろうかという疑問が雨粒の冷たさと共に頬にしみた。笑い過ぎた後のさわやかな感覚だった。

河原を越えてから道は草原の中に入り、草原を通り過ぎると、眼の前に樹林が見えた。紅葉に色どられた山が待っていた。

「変よ、この辺に美濃戸小屋がある筈よ」

美佐が、マップケースの中の地図に眼をやって言った。確かこの辺に小屋がある筈なのに、ないとなれば、まさか道を取り違えたのではないかという顔だった。先行の男たち三人も、地図を出して、なにか話し合っていた。

美佐は二十メートルの間隔をさっさとつめて行ってノッポに、

「美濃戸小屋はどこでしょう、もしかしたら道を……」

とがめるような口調だった。

「美濃戸小屋ですか、美濃戸小屋は二カ月前まではそこにあった。その川底でも掘り返して見たらいかがでしょう」

ノッポはビッケルの先で砂礫に蔽われた川をさして言った。美濃戸小屋は台風の水害で押し流されて消えていたのである。

二つのパーティーはその地点で合流した。一緒になったが言葉は交わさなかった。そうすることが、山のエチケットでもあるように、男達のグループと女達のグループは一列になったまま、多彩に色どられた森の中へ入っていった。道が急に細くなった。先生が前の二人の男に声を掛けて足を止めると、眼で森の中を探した。赤紫色に紅葉した山葡萄の葉が森と道との間をさえ切っていた。先生は葡萄のつるの中へ入っていった。先生がなにものかを探している様子は、その姿勢で明らかであった。彼は両手で山葡萄のつるをたぐりながら、木の枝から枝へ眼を移していた。彼は一本の冷たい肌の色をした立木の傍で立ち止まって、用心深く宙に眼をやった。彼の両手がかを受け取るように拡げられた。その恰好は落ちてくる木の実でも受け取るかたちだった。

ついに彼は手の平になにものかを受け取って、大切なものを求め得た顔で見詰めていた。

「先生、なんですか」

縞のチョッキが声を掛けた。

「コブシだよ、コブシの実だよ」

縞のチョッキに答えているようでもあったし、そのささやかな発見を楽しむようでもあった。

霧が霽れて、瞬間だったが、太陽の光がさしかけた。コブシの木、枝から無数の糸が垂れ下り、クモの巣の糸ほどにも見える白い糸が沢から吹き上げて来る風にきらきら光っていた。糸の先に真赤な小さい実が揺れていた。

「それが木の実なの……」

美佐は、ことごと共にやぶの中へ踏みこんでいた。彼女は先生の傍で、先生のやっとな同じように、コブシの実を手を受けた。彼女の白い手の平の皿に受け止められた小さい赤い実は宝石のように輝いていた。

「コブシって？」

美佐はコブシを知らなかった。どこかで聞いたことのあるような名前だったが、くわしいことはなにも知っていなかった。彼女は首を傾けて先生の顔を見上げた。

「春先に咲く、真白な美しい花がコブシなんだ。春を知らせる純白な花なんです、その実がこれだ」

彼はその実を懐紙に包むと、ポケットに入れて、コブシの幹に手を掛けて空を見上げた。山霧が太陽をさえ切り、また雨が降り出した。

歩き出してから、すぐ女達はひそひそ話のおしゃべりを始めた。

「やっぱりあの先生は芸術家よ、あの眼を見ただけで、あの眼は芸術家でなければならない眼よ」

先頭の美佐が二番を歩いている絢子に告げ口でもするように言った。